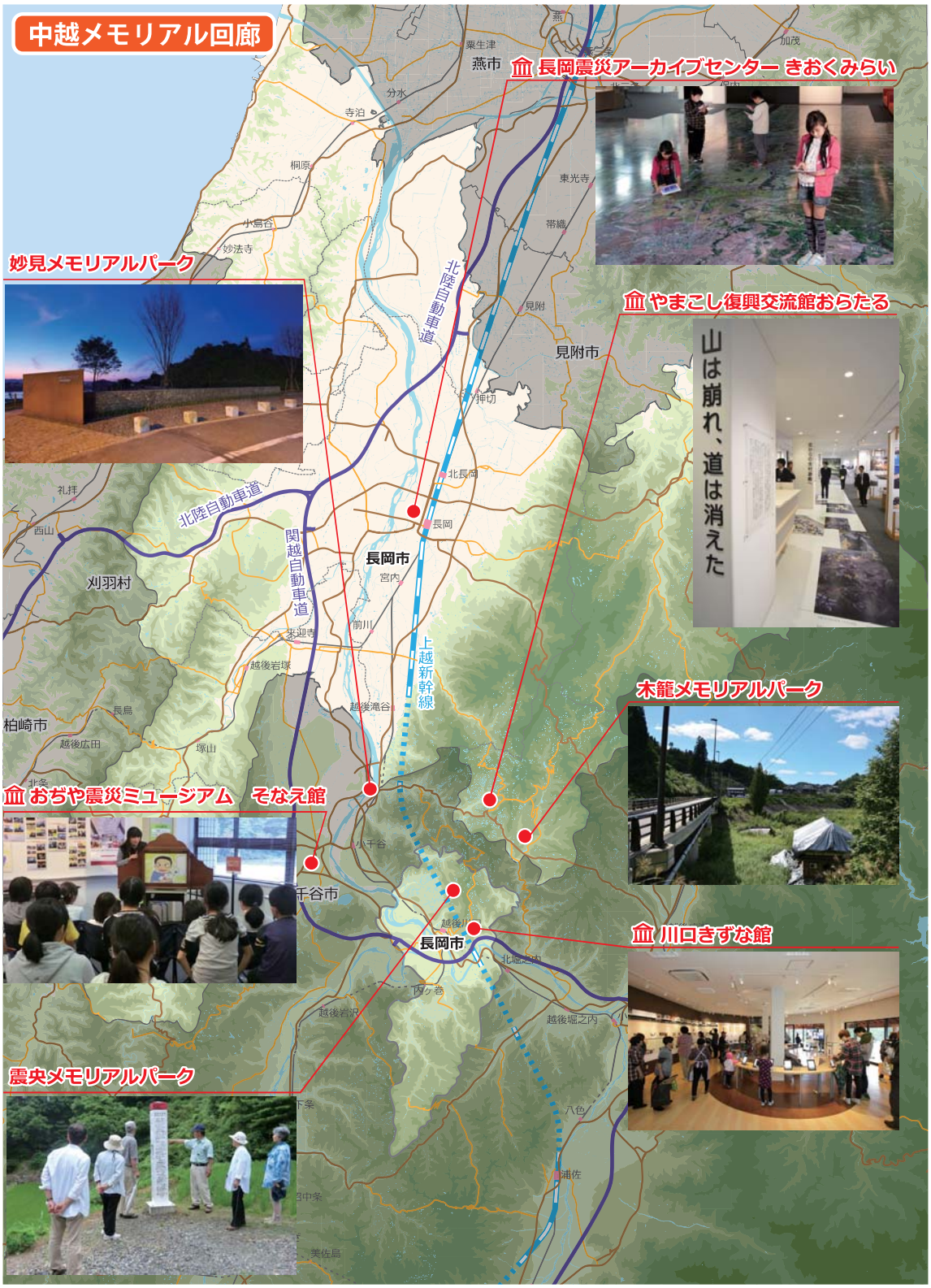
3章　復興の推進力は、地域の資源、人、力。



～地域に応じた取り組み～

震災発生から約７年以降は「発展期」。震災によって生まれた地域外との交流から地域の活力が少しずつ戻るにつれ、地域の人々もおもてなしや活動の場の提供をはじめる。被災地としての経験やノウハウの発信もはじまる。様々な「交流」から生まれるものは、全て地域のチカラになり、復興は一歩ずつ前へ進むのである。

地域外との交流がもたらす地域の活力

震災直後から、炊き出しや被災家屋の清掃・家財整理、避難所の手伝い、雪下ろしなど多数のボランティアが支援活動を行った。被災した人々が地域に戻っても、外部との交流はさまざまな形で継続され、復興を目指す地域への刺激となり活力を生み出した。被災した人々もまた、外部の人たちを受け入れるため、交流施設を設けたり、山ならではの暮らしでもてなした。

地域づくりの実践の場

大学生インターンを受け入れ、住民と共に集落（コミュニティ）をどうしていくかについて考える活動をする地域もある。学生たちは、インターシップ期間終了後も集落のお祭りや田植え、稲刈りなどに参加し交流がつづき、地域の魅力発信と資源を活かした活動の展開につながっている。こういったノウハウをベースにインターンシッププログラムが提供され、大学生に地域づくりの実践の場が提供されている。

継続的な交流から移住へ

ボランティアや地域復興支援員、インターンシップなど、長期にわたり集落内で生活・活動し、住民とふれあう中で、地域に魅せられて移住する人々がいる。移住した人々は、地域の魅力に気づいた人であり、地域にとっては魅力の再発見につながる。また、地域への活力、地域づくりの担い手として地域の人々からの期待も大きい。

多世代交流のすすめ

避難生活において、子育てをしている世代は肩身の狭い思いをすることが多く、それを少しでも解消し元気にしようと始まった交流活動。活動を続ける中で、さまざまな世代が参加できるようにすることで、同じ世代だけでは生まれなかった「つながり」が生まれはじめた。いつも誰かに助けてもらう側の高齢者もその経験や知恵が交流のきっかけとなる。多世代交流で地域みんなの元気につながる。

被災経験を伝えるという交流

震災から10年を迎えた被災地では、これまで多くの方々の支援や交流からさまざまな活動を生み出すことができた。震災の記憶と教訓、復興の道のりを伝えることが、これらに応えるすべだと考える。新潟県中越大震災のメモリアル拠点である４施設、３メモリアルパークを結ぶ中越メモリアル回廊は、苦難を乗り越えた人々の想いを紡ぎ揺るぎないチカラに変えて世界と未来に発信する。

1）地域外との交流がもたらす地域の活力

震災を契機にし、今も続く交流

被災地では、被災直後から壊れた家財整理、炊き出し、避難所の手伝いなど多数のボランティアが支援活動を行った。インフラが復旧し、仮設住宅から地域に住民が戻ってからも外部者との交流は続き(※1)、それが地域の活力維持に寄与している。

（※1）
【継続する交流】
中越大震災の震源地であった川口地域では、震災から３周年祈念として、震災直後の避難生活時のボランティアと「ボランティア同窓会」を開催し、震災当時を思い出しながら再会を喜び合った。その後も数年に渡り同窓会は継続され、復興の過程をみていただきながら一過性でない支援・交流を続けている。

【国際ボランティア学生協会IVUSAとの交流活動】

栃尾地域

年間800人の学生が過疎の集落で活動

千野　義夫

長岡市栃尾地域では、中越大震災によって住む家を失った被災者のために、北荷頃に「仮設住宅団地」を建設、当初は69世帯、205人が引っ越してきた。「栃尾では被害が集中して発生することがなかったため、それまでつきあいの無かった市民が、一つの団地で暮らすことになったんです」。仮設住宅とはいえ、震災をきっかけにして、新しい「住宅団地」がつくられたことになり、行政は独立した行政区として対応、住民たちは自治会(町内会)を結成して独自の活動を行った。

「平成19年４月、最後の住民が引っ越して仮設住宅の幕は閉じたんですが、住民の交流を続けてきました。そんなこともあって、有志による「仮設住宅同住会」(その後、とちお同住会に名称変更)を立ち上げ、地域活性化のためにいろいろな活動を始めたんです」と千野さんは当時を振り返る。

地震の年、12月に降った雪が根雪となり、年が明けても雪は容赦なく降り続いた。仮設住宅の屋根雪も1mを超え、雨漏りがしたり戸、襖が動かなくなった。高齢で屋根に登れない人もいたし、降ろした雪の始末にも困っていた。この時首都圏、関西から３回にわたって雪掘りに駆けつけたのが国際ボランティア学生協会(IVUSA)の大学生たちである。

雪が消えても仮設住宅とIVUSAとの交流は終わらなかった。厳しい暮らしのなかで団地内に花を植え、学生がヒアリングをして記念文集を発行、インド洋大津波では、仮設住宅からインドの被災者に贈る千羽鶴や文房具を被災地で活動するIVUSAに託している。

学生たちが交流を持続するために、栃尾に宿泊可能な拠点がほしいということになった。半蔵金地区田代は２世帯が暮らす集落だが、ここに建つ築100年を超える古民家を借り修繕を始めたのは21年５月。この地区に戻っていた仮設住宅経験者の2世帯と同住会、IVUSAが協力、一部は専門家の手も借りて、「梁山荘」と命名された約86坪の古民家を宿泊できるところまで修繕した。これと並行して集落の神社を修復をしたり、栃尾祭の参加、耕作を放棄された田圃で米をつくり、畑を再生して枝豆、ジャガイモなど50種以上の野菜を栽培している。自給自足を目指して少しずつ拡大した田畑は、水田が20アール、畑が60アールにまでになった。

とちお同住会とIVUSAが協力して始めた活動は絶え間なく継続され、最近では年間約800人の関東、関西の大学生が「梁山荘」を利用、学生の出身地は北は北海道から南は沖縄・宮古島まで全国各地に広がっている。「梁山荘」で収容しきれない場合は、地区内の公共施設に分宿、日用品類については全て栃尾で購入している。

同住会代表の千野義夫さんは、「地震のことを知らない学生もいるが、栃尾にいる時はみんな楽しそうに活動している。楽しい活動であることが、IVUSAと梁山荘が栃尾にしっかりと根をはることになった最大の理由かもしれない」と話している。

中山間地域における遊休施設の活用

全国の中山間地域では人口減少・高齢化に伴い空き家の増加や少子化による学校施設の統廃合が進んでいる。長岡市でも同様だが、地震を契機としてその傾向に拍車がかかった。

復興過程においては、そうした施設を交流拠点として活用する事例が増えている。小国地域の法末集落では、震災前から廃校を宿泊施設にした交流が行われていたが、震災後、この施設の復活が集落の機運を高めるきっかけとなった。

また、川口地域においても、廃校になった木沢小学校を再利用し、集落のおとうさんが多様な体験プログラムで、おかあさんたちが地元の米や野菜、山菜で作る郷土料理でもてなす交流拠点「朝霧の宿やまぼうし」を運営している。

【法末自然の家やまびこ】

【朝霧の宿やまぼうし】

小国地域

宿泊施設「やまびこ」の再開が集落を元気に

大橋　昭司

長岡市小国地域法末集落の「法末自然の家　やまびこ」は、集落が管理・運営する宿泊施設である。元々この建物は、昭和63年に子どもの人数が減少したため廃校になった法末小学校だった。集落の中心にあり、たくさんの卒業生を送り出した校舎を廃屋にしてしまうのはもったいない、地域活性化のために利用できないかと知恵を絞り、子どもたちの宿泊施設にする案が浮上した。

法末の魅力を活かした施設にするために、平成２年に集落の全60戸(現在は42戸)が1,000円ずつ出資して法末振興組合を設立、集落が力を合わせて運営する「やまびこ」はスタートした。

食事は集落のかあちゃんたちがつくる田舎料理、昆虫採集や雪遊びなど、子ども向けの遊びのインストラクターはとうちゃんたちが交代でつとめた。友好都市の東京都武蔵野市の人々を中心に、「田植えツアー」や「稲刈りツアー」が企画され、集落内に開設したグリーンリース(貸し農地)に訪れる人も増えてきた。「やまびこ」は、毎日の暮らしに楽しみをもたらす「地域交流の拠点」であり、「雇用の場」であった。最大で50人が宿泊可能の「やまびこ」は、オープンから10年を経る頃には、年間1,000人を超える利用客があった。

そして、中越大震災が発生、集落と周辺地域を結ぶ道路が寸断され約３日間孤立した。「やまびこ」も、建物のいたるところに亀裂が入り、厨房の皿や家具が散乱し、震災後には立ち入りが禁止された。

だが、法末集落では、住民のほとんどがまだ仮設住宅に入居しながら、「やまびこ復活」を復興の柱に、いち早く動きだした。

平成14年から振興組合の組合長をつとめる大橋昭司さんは、こう話している。

「震災から約１年２カ月後に再開しました。これでやりなおせる、そんな元気が湧いてきた。やまびこを運営するためにも、自分たちが法末で頑張ろうという気持ちになった」という。やまびこが活発に活動していれば、集落は元気になる。やまびこのことがあるから、集落がひとつになれる。年中無休でたいへんだけど、孫みたいな子どもと遊んだり、女子大生に山のことを教えられるのは楽しいさ」。

さらに支援の人たちの協力を得て、自然体験コースを整備、ホタル、こうもり、モリアオガエルの住みかである川や池、洞窟を一つひとつ蘇らせ、崩れた遊歩道や神社の石段を修復した。平成21年春からは「オープンガーデン」と名付けたイベントを行っている。個人宅の庭先などで栽培している草花を「やまびこ」の利用者などに開放し、自由に鑑賞できる仕組みである。

宿泊者数は平成20年には地震前に並ぶ年間1,000人を達成、大橋さんたちの目標は2,000人である。目標を実現できる頃には、法末集落と大橋さんたちは、今よりもっともっと元気になっているはずである。

2）地域づくりの実践の場

大学生インターンの受け入れで生まれた交流

栃尾地域一之貝集落(※1)では、平成21年夏から、都市部で生活する大学生を地域づくりインターン(※2)として受け入れる事業を始めた。

８月の２週間、都会から来た大学生は、地域住民と交流し、集落の行事と生活に触れ、地域づくりについて考える活動を行っている。

参加した大学生たちは夏の活動期間後、東京でもできることがあるのではないかと大学生が中心となった応援団を立ち上げ、集落のお祭りや田植え、稲刈りなど一之貝集落を定期的に訪れる交流を継続的に続けている。活動は大学生だけでなく、一之貝出身者なども加わり、東京でのお米販売や交流会などにも広がった。

大学生の受け入れをとおして生まれた新たな交流は、年を重ねるごとに広がり、地域の魅力発信と集落づくりにつながっている。

地域づくりの実践の場

中越大震災を機に、首都圏をはじめ多くの人たちとのつながりが生まれ、そのなかから震災からの復興に向けて、地域の人たちが主体となって、体験交流・ツーリズム、直売所や農産加工、農家レストランなど、さまざまな活動が起こった長岡市および中越地域は、全国でもまちづくり活動が活発な地域といわれるようになった。

一之貝集落だけでなく、これまで培った中越地域のさまざまなノウハウをベースにして、地域づくり・産業おこし・ムラの暮らし再生などを大学生に学んでもらうインターンシップ・プログラムを提供している。

インターンシップは、若いよそ者の視点が集落への刺激となる、あるいはまちづくり、地域づくりに活かされることもある。住民は震災直後の家財の整理・避難所の運営からはじまり、現在に至るまで多くの方々からいただいた支援に対する感謝を、地域づくりの実践の場の提供という形で伝えていると言える。

（※1）
【栃尾地域一之貝集落】
人口353名。高齢化率は42%。平成13年に小学校は隣接地域と統合され廃校なり、子育て世代は集落から流出している。標高250mに位置し、新潟でも有数の豪雪地帯であり、真冬には３m近い雪が積もることもある。

【一之貝集落】

【栃尾地域でのインターンの活動】

（※2）
【インターンシップ】
一般的には学生が企業で一定期間就業体験を行うものである。ここでは豊かな自然に囲まれ、昔ながらの"山の暮らし"を体験しながら、農業や地域おこし、コミュニティ・ビジネス等の生業起こしなどを行う。

Iターン留学「にいがたイナカレッジ」

「にいがたイナカレッジ」は、これまで培った中越地域の様々なノウハウをベースに、地域づくり・産業・ムラの暮らしなどを学んでいただくインターンシップ・プログラム。(社)中越防災安全機構 復興支援センターが事務局を務め、集落と都市の若者たちをつなぐ役割をしている。

「実績型training」(実施研修)と「地域学school」(講義・座学)を組み合わせ、自分らしいライフスタイルを実現するプログラムとなっている。

実践型training 実地研修		地域学school 講義研修		
村の現場で住民の人たちと一緒になって汗を流しながら学ぶ 「地域づくり」、「コミュニティビジネス」、「農業」、「6次産業」などの実施現場での研修プログラム	×	中越地震を機に活発になった"地域づくり活動"を体系的に学ぶ 地域復興支援員の研修等で蓄積した人材教育・地域づくりのノウハウを体系的にプログラム化	=	イナカ暮らしの創造

栃尾地域

首都圏の大学生が農村の暮らしを体験

茨木　徹夫

中越大震災からの復興や地域づくりを学ぶために、首都圏の大学生が集落に来て、聞き取り調査や農業体験などを行いたい、ついては「協力してほしい」と栃尾地域の一之貝集落に要請があったのは、平成21年春のことだった。ボランティアや学者など外部からの訪問者は震災を境に多かったが、こんな目的は初めてである。さらに大学生は、約2週間も滞在するという。集落の人たちは、大いに戸惑ったという。茨木徹夫さんは当時の気分を、次のように話している。

「はじめは、学生たちは何のためにやって来るのか、自分たちは何をすればいいのか、見当もつきませんでした。大学入試に合格しているのだから勉強のできる子どもたちなのだろうが、とにかく付き合い方が分からない。面倒なこと、というのが正直な気持ちでした」。

８月、４人の大学生が一之貝にやって来た。彼らは集落の畑仕事を見学したり、草刈りなどを手伝い、大人たちには被災の経験や集落のことを質問し、子どもたちには勉強を教えた。

「このことが、集落にとって役立つことなのか分かりませんでしたが、長続きしない、この年限りのことだろうと思っていました。しかし田舎の生活を初めて経験した彼らには、何か感じるところがあったようです。翌年には別の学生が来て、結局今年で5年目になりました。第一期生は今も時々顔を出してくれる。最近では私たちもすっかり馴れて、東京の学生だからといって気を遣わなくなりました」。

大学生たちがやって来るのは、通常は企業などで就業体験として行う「インターシップ」を農村地域を行うためであり、農作業の手伝いや冬場の雪掘りは、職業意識の向上や職業選択に役立つ経験を得ることを目的としている。一之貝集落は、その舞台を提供していることになる。

第一期生たちがその楽しさや有益さを後輩に伝え、それが定着して次から次とインターンがやって来ることになった。参加者は一回十数名となり、参加を希望する大学も増えていった。そして集落では、農業や環境保全活動を取り組む中山間地への国の補助金制度である「中山間地域等直接支払制度」(※3)を活用して資金を取得、受け入れ体制を整えた。

滞在先も当初は民泊だったが、茨木さんの知人所有の空き家を借り、学生たちは自炊するようになった。米や肉などは自前だが、野菜や漬け物は集落の人たちからの届け物で間に合うようになっている。

一之貝集落では最初は戸惑い、迷惑顔の人たちもいたが、今では若くて元気の良い学生たちの訪問を歓迎するようになった。小中学生や若い世代の少なくなった集落にとって、地域活性化に直結することは無かったとしても、彼らが携えてくる賑わいと都会の空気は刺激的である。

インターン受け入れが始まって６年が経過、栃尾の一之貝集落は、首都圏の大学生には少しは知られる存在になっているらしい。そしてやって来るのは「新人」だけではない。「最初の年の４人のうち、今は九州にいる一人を除いた３人など、経験者たちが時々一之貝に来ています」と語る茨木さんの顔は、誇らしげであった。

（※3）
【中山間地域等直接支払制度】
耕作放棄地の増加等により多面的機能の低下が特に懸念されている中山間地域等において、農業生産条件の不利を補正する農家等への交付金により、農業生産活動の維持を通じて、耕作放棄の発生を防止し多面的機能の確保を図る制度。

3）継続的な交流から移住へ

長岡に移住

地域復興支援員や、インターンシップなど、長期にわたり集落内で生活し、活動をともにすることで、地域の魅力に取り憑かれ移住という選択をするものもいる。

川口地域

竹田集落に移住して17年 頑張らず、ゆっくりと

砂川祐次郎

首都圏を脱出して「田舎に住みたい」と考えていた砂川祐次郎さんが、本気で移住先を探し始めたのは、高校を卒業して内装関係の会社に勤めて３年が経過した頃からだった。温泉があり、母親の実家があったので、子どもの頃から馴染みもある妙高あたりが第一候補だった。しかし行ってみると思っていたより観光地化していたし、土地の値段も高かったので諦めた。他の土地もいろいろと見て回ったが、17年前にたまたま訪れた竹田集落(※1)を一目で気にいったという。

「売りに出されていた古家も安かったし、景色も素晴らしくて、温泉もすぐ近くにある。その時は竹田が川口町(当時)であることも知らずに決めました」。

砂川さんが育ったのは鋳物工業で知られた埼玉県川口市。荒川を隔てて東京に隣接、今では人口56万人、埼玉県ではさいたま市に次ぐ第二の都市である。そんな町の商店街の近くで生まれ育った砂川さんは、子どもの頃から田舎で暮らしたいと思い、平成7年に実現させたのである。

川口といえば豪雪、そして過疎と高齢化だが、砂川さんはそうした環境を次のように考えている。

「冬になれば雪が降るのはしょうがないですよ。積雪４mを覚悟していて2.5mであればめっけものでしょう。近くのばあちゃんはいつも野菜なんか持ってきてくれるし、回覧板を持って行ったついでに半日も茶飲み話ができる。たまに早く帰宅すると近所のばあちゃんから、昨日は早かったねと言われる。この距離感が僕にはちょうど良いのです。雪の多いことも、住んでいる人が少ないのも、すべて気持ちの持ちようだと思います」

中越大震災に遭遇したのは、竹田集落に引っ越してきてご近所とかなり仲良くなった頃だった。砂川さんも被災したが、竹田集落の一員として皆と歩調を合わせながら、時間をかけて無理をせず、ゆっくりと元の暮らしに戻ることができた。

「災害から立ち直って日常生活に戻ろうとする、その過程で集落のつながりが強くなったように思います。無理をしなかったのが良かったと思います。集落で地震で壊れた遊歩道を修復したのですが、いろいろな人の協力があったんですけれど、やれる人がやれる範囲内でやろう、頑張ろうといわないようにしようと言い交わして始めました」。

砂川さんは今、十日町の観光施設に勤める傍ら絵を描いて生活している。「田舎に憧れていた人」から「田舎の人」になって17年、「田舎の暮らしはたいへんだと思いますが、それは気の持ちようで何とかなるものです。生まれ育った埼玉には愛着がありますが、私が落ち着くのは朝起きて家の外に出れば素晴らしい景色が広がる、ここ竹田だと感じています」と話している。

（※1）
【竹田集落】
竹田集落は、震災後世帯数が10戸から７戸に減少、過疎化がさらに加速しているが、温泉やホテル、運動公園などに近接し、集落背後の尾根に東山遊歩道があり、自然散策や景観、眺望を楽しむ人が多く訪れている。

【オール川口フェスタ
即興イラストパネル展】

【かんじきウォーク】

4）多世代交流のすすめ

身近な都市ー農村交流

長岡市の中山間地域にとって、都市との交流は、首都圏まで目を向けなくても身近なところにある。長岡市街地の若い母親は、自然食や郷土料理に興味があり、中山間地域の集落は子どもの笑い声で元気になった。

長岡地域

子育て支援から始まった多世代の交流

佐竹　直子

長岡出身の保育士の佐竹直子さんは、自身の出産・育児の経験から若いママさんが孤立しがちなことを痛感し、保育講座で知り合った母親らと、平成11年に「長岡子育てライン　三尺玉ネット」を結成、情報交換・情報提供のために情報誌を発行したり、母親の意見や要望を行政につなげる活動が中心であった。

活動を始めて３、４年が経過した頃、壁に直面しているように感じた。子育てに関連する団体や行政、専門家などの関係者は熱心なのだが、熱意が実効性のある成果に結びついていないのである。また、長岡の子育ての環境が良くなったという実感が得られなかったのである。そのさなかに中越大震災が発生、佐竹さんも被災したが、地震でもっと厳しい環境に追いやられた避難所にいる母親たちを支援する活動を開始した。

避難所となった学校の体育館や教室には仕切りもなく、さまざまな世代、家族が同じ空間を共有している。赤ちゃんがいるからといって特別の配慮されているわけではなく、子どもたちは当然のように泣いたりぐずったりする。時には「うるさい」、「外で泣かせろ」といった文句が容赦なく浴びせられる。母親の置かれている厳しい環境を改めて痛感した佐竹さんは、より広い視野に立った活動が必要だと考え、「三尺玉」のスタッフと共に「多世代交流館になニーナ」(※2)を立ち上げることになった。

「子どもをかかえて肩身の狭い思いをしているの母親を見て、子育て世代だけでつながっても、支援には限界があると気づきました。そこで仮設住宅の空き施設を利用して、手芸など多くの世代が参加できる行事を企画しました。そこで知り合った仮設住宅で暮らすお母さんたちと子育て中のママさんが自然と話をするようになり、教え合うようになったのです」。

仮設住宅からスタートした「になニーナ」の活動を通じて、多世代間の交流が具体的になっていった。被災者に好評だったのは「教えておばあちゃん?　長岡の郷土料理」であった。この企画では、被災したおばあちゃんが若いママさんたちに郷土料理を教える講師となっての料理教室である。被災の日からいつも支援され、援助される側だったおばあちゃんが、この日は教える側になったのである。地震で家や田畑を失い、失意の底にあったおばあちゃんたちにとって、久々に訪れた晴れの舞台であった。

佐竹さんの活動の範囲は、中越大震災をきっかけにして子育て支援から多世代交流へと広がっていった。この活動を知り、東日本大震災の被災地を含む各地から、「うちにも、になニーナがほしい」という声が寄せられているという。

それに対して佐竹さんは、「子育て支援や多世代交流といっても、求められていることは地域や環境によって異なり、チェーンストアのように標準化することはできません。仕組みや場があるからといって、支援、交流が始まるわけではないのです。何回でも現場に行って、お茶を飲んだりして無駄話しをする。そこから始めましょう」とアドバイスしていると言う。

（※2）
【多世代交流館になニーナ】
子育て世代を中心に多世代・多文化・多分野・多地域の交流を日常的にできる場所と機会の提供をすることによって、「人との協力・関わり」を大切に、お互いがはぐくみ合える社会を目指している。

【になニーナの活動】

5）被災経験を伝えるという交流

視察の受け入れ

中越大震災から10年を迎えた被災地では、これまでの多くの方々の支援や交流からさまざまな活動を生み出した。

地域に受け継がれた自然の恵みと棚田などの景観、牛の角突きなどの伝統文化にあわせ、農家レストランやアルパカ牧場、また多様な農村体験プログラムなど新たな魅力・資源が加わったことで、全国からの来訪者や自治体や地域づくり団体などの視察も多い。

来訪者に長岡市および中越地域がしっかりと伝えるべきは、震災の記憶と教訓、震災からの復興の道のりである。

中越メモリアル回廊

新潟県中越大震災のメモリアル拠点である４施設、３パークを結ぶ中越メモリアル回廊(※1)。それは被災地・中越地域をそのまま情報の保管庫にする試みである。

４施設は長岡駅前中心部の長岡震災アーカイブセンター「きおくみらい」、川口地域の「川口きずな館」、旧山古志村のやまこし復興交流館「おらたる」、小千谷地域の震災ミュージアム「そなえ館」であり、３パークは母子３人の車が飲み込まれ２歳男子が救出された「妙見メモリアルパーク」、川口地域の中越大震災の震源地の直上の「震央メモリアルパーク」、山古志地域の水没した家屋が残る「木籠メモリアルパーク」である。

中越メモリアル回廊

（※1-1）
【メモリアル施設の整備経緯】
平成23年10月に長岡震災アーカイブセンター「きおくみらい」、川口きずな館、おぢや震災ミュージアム「そなえ館」が、平成25年10月にはやまこし復興館「おらたる」がオープンした。年間来館者数は4館合計で約90,000人

（※1-2）
【中越メモリアル回廊（施設）
年間利用者数　平成26年】

	一般	団体	合計
きおくみらい	12,145	5,769	17,914
きずな館	16,005	2,374	18,379
おらたる	20,124	12,730	32,854
そなえ館	7,387	14,417	21,804
合計	55,661	35,290	90,951

団体：10人以上

（※1-3）
【施設連絡先】
■長岡震災アーカイブセンター
きおくみらい
〒940-0062
長岡市大手通2-6
フェニックス大手イースト2階
0258-39-5525
■やまこし復興交流館おらたる
〒947-0204
長岡市山古志竹沢甲2835
0258-41-1203
■木籠メモリアルパーク
長岡市山古志木篭地先
0258-41-1203（おらたる）
■川口きずな館
〒949-7503
長岡市川口中山1441番地
川口運動公園内
0258-89-3620
■震央メモリアルパーク
長岡市川口武道窪地先
0258-89-3620（川口きずな館）
■おぢや震災ミュージアムそなえ館
〒947-0026
小千谷市上ノ山4-4-2
小千谷市民学習センター
「楽集館」2階
0258-89-7480
■妙見メモリアルパーク
小千谷市浦柄地先
0258-89-7480（そなえ館）

それぞれの拠点を巡り、震災の記憶と復興の軌跡にふれることで「新潟県中越大震災」の巨大な実像を浮き彫りにする。
そこには地震から生まれた膨大な物語があり、輝く希望がある。

中越メモリアル回廊は、苦難を乗り越えた人々の想いを紡ぎ揺るぎないチカラに変えて世界と未来へ発信する。

中越大震災の体験と教訓を多くの人と地域、そして子どもたちに伝えることで、減災社会の実現を目指している。

【きおくみらい】

【おらたる】

【川口ぎすな館】

【そなえ館】

山古志地域

感謝の気持ちを伝え 今の山古志を見てほしい

川上　沙織

中越大震災発生当時、川上沙織さんは山古志中学校の1年生、種苧原集落で祖父母、両親や兄弟３人で暮らしていた。突然の地震、それに続く避難所での生活は経験したことのないことの連続だったが、「怖いという思いより、不安感が強かった」と記憶している。

馴れない生活のなかで強く印象に残ったことは、全国からの支援、応援のことだった。膨大な物資が届き、それと共に多くの方々が義援金を募ってくれた。警察、消防に続き道路、電気などを復旧させる専門家が中越地方に参集、多数のボランティアが訪れ被災者を応援した。

地震から約1年が経過した頃、山古志中学校は記録誌「あれから一年」を刊行、生徒全員の作文を収録している。川上さんの作文の書き出しは、「私は、この一年たくさんの人に支援していただいて本当に感謝しています」だった。さらに一年が経過した震災２年後の作文集「そして未来へ」では、支援に感謝しつつ、「そして私も将来困った人を助けられる人になりたいです」と結んでいる。

「避難生活をきっかけに山古志から引っ越した人もいますが、うちは家族全員が最初から種苧原の自宅に戻るつもりでした。私もそのことが当然だと思っていました。友だちといつ山古志へ帰るのか、ということは話したことはありますが、町に住みたいとか帰りたくないとかということは話題になりませんでした」。

平成18年10月、山古志中学校は新校舎で授業が再開されたが、18人の同級生全員が揃い、転校した生徒はいなかった。川上さんは中学卒業後は県立長岡大手高校に進み、クローバーバスを利用して通学した。「バスの本数に限りがあり、家を出るのが朝早かったことと路線バスとの乗り継ぎが不便でした」。

平成23年、川上さんは東京の短大に入学する。東日本大震災は引越作業のさなか、東京のアパートで遭遇した。そして２年間の東京での大学生活、一人暮らしを楽しみ、卒業後に帰郷、今は「やまこし復興交流館　おらたる」に勤務している。

「おらたる」での仕事は多岐にわたるが、視察に訪れる人を案内したり説明するのも彼女の重要な職務である。訪れる人たちに、「あの時の支援、ありがとう」の気持ちを直接伝えられることになった。

「やはり自分の体験を伝えると、本当のことが分かってもらえると思います。たとえば私は10歳だったのですが、家族といっしょに避難している写真が展示されているところへ来ると、来館者の皆さんは感心されることが多いですね。でも、もっと勉強しないと自分の気持ちは伝えられないと感じています」。

「おらたる」には「復興交流館」という名称がつけられているように、震災の被害を伝えるだけでなく、集落の中での交流を進めるという目標がある。川上さんの次の目標は、それを実現することである。

「震災のこと、支援への感謝も分かってほしいれけれど、私たちが山古志に帰ってきて、みんな元気で頑張っている今の姿を見てもらいたい。そのためには、もっと上手に紹介できるようになりたいです」、これが今の川上さんの気持ちである。